



東京ミッション研究所ニュース

第 88 号
2019 年 5 月発行

〒189-8512 東京都東村山市廻田町 1-30-1 東京聖書学院内
TEL/FAX 042-396-5597 郵便振替 00150-5-29091
Email アドレス tokyomissionri@gmail.com



「令和の時代を迎えて」

金本 悟 東京ミッション研究所初代総主事 1990-2003
同研究所第二代所長 2003-2015

日本の元号が「令和」に変わった。東京ミッション研究所はデイヴィッド・ボッシュの『宣教のパラダイム転換(上、下)』の出版により、キリスト教界に認知される研究所となった。『天皇制の検証—日本宣教における不可避な課題』は当研究所の最初の出版物であった。当研究所は設立の準備を1988(昭和63)年に開始し、1989(平成元)年9月に宣教学者ウィルバート・シェンク師フォーラム、千代崎秀雄師引率第1回日本宣教研修ツアー(伊勢)を経て同年12月に設立された。昭和から平成へと変わる時期に当研究所は設立されたのである。

ロバート・リー初代所長の働きにより、ボッシュ師の日本招聘が決まっていたが、来日直前に交通事故死された。しかしながら、『宣教のパラダイム転換』の翻訳作業が、福音派、教団系、ローマ・カトリック系の同志の共同作業として結実した。

この書をきっかけに、東京ミッション研究所は、ポストモダンへのパラダイムシフトの研究を深め、アラン・クライダー著『〈聖〉をめざす旅』、ウィラード・スワートリー『平和の契約』などを出版した。また、ジョン・ハワード・ヨーダーの『愛する人が襲われたら』を出版し、ヨーダー研究会の発足と『ジョン・H・ヨーダーの神学』(新教出版社2010)を出版した。また、イースタン・メノナイト大学に設立された Institute of Conflict Resolution(後の Institute of Conflict Transformation)の設立者であるロナルド・クレイビル師を招いて「平和セミナー」を開き、「平和作り」を提供するようになった。

私は第二代所長となったが、ロバート・リー師の志を引き継ぎ、2005(平成17)年8月に「日本宣教会」を同志と共に設立し、事務局を東京ミッション研究所内に設置した。ポストモダン時代を見据えて、ローザンヌ運動との連携を深め、2010(平成22)年10月に行われた第3回ローザンヌ世界宣教会議(南アフリカ共和国ケープタウン市)後に正式発足した日本ローザンヌ委員会の委員長を務めるとともに事務局を研究所内に引き受けた。なお、第3回ローザンヌ世界宣教会議は、1910(明治43)年に開催された第1回世界宣教会議(エディンバラ会議)の100周年を記念して開催されたものである。

2015(平成27)年に東條隆進師が第三代所長として就任された。2016(平成28)年2月29日にロバート・リー師が召天された。リー師の足跡は、聖書的なラジカル信仰を現代社会において生きていくことが宣教の実践であると考える者たちを生み出した。その宣教活動を学術的にリサーチすることが東京ミッション研究所の使命である。

これらの働き人の中には、九州の熊本大地震の救済活動のために「九州キリスト災害支援センター」を設立した横田法路師、2019(平成30)年2月に庭野平和賞(世界平和に貢献した個人や団体を表彰)を受賞されたジョン・ポール・レデラック師の著作『敵対から共生へ—平和づくりの実践ガイド』を翻訳した水野節子師及び宮崎誉師もいる。主が東京ミッション研究所を用いてくださっていることに心から感謝をささげるとともに、東京ミッション研究所のために奉仕してくださっている方々、祈ってくださっている方々、財政的に支援してくださっている団体や個人の方々に御礼申し上げる。(6頁へ)

2019年2月25日 冬季フォーラム報告

キリスト者の証言

～人の言語化の営みから宣教を考える～

講師：原 敬子*

(報告者 西岡義行)

今年の冬季フォーラムは、自らの経験を言語化する中で、時に自らのアイデンティティが形成されたり、自らの信仰が確立されていく具体的な経験の考察を正面から取り上げることを目指しました。「身をもって知った」と表現されるような人格の宗教経験は、証しとして語られ、語り得ない次元をも包摂し、語る者と聞く者とを結び付け、それを共有する共同体の伝承として物語られてきました。こうした、言語化する人間の基本的営みを解きほぐし、「証し」を巡る宣教の本質に光を当てることは、行きづまりを覚える日本での宣教を再度捉えなおす重要なテーマです。

そのことのために選ばれた講師との出会いは、2016年の日本宣教学会の全国研究会の発表でした。その内容は、『宣教学ジャーナル』の11号に掲載され、同年に『キリスト者の証言—人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』（教文館、2017年）が出版され、どなたも読むことが可能となりました。

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

今回のフォーラムでは、外資によって支えられた宣教師らの働きに負うところが多い日本の宣教の中で、向き合うべきイエスとの交わりのか細い声があり、その声に真実に向き合うことに焦点が当てられました。「声なき声」をいかに聞きこんで

* 広島大学大学院修士課程修了(教育学)。Institut Catholique de Paris, L'Institut Supérieur de Pastorale Catéchétique, STL 取得。上智大学大学院神学研究科博士号取得。上智大学神学部准教授、援助修道会会員。著書に、「信を語ることばを考える—P・リクール『証言の解釈学』を手がかりに」(『人間学紀要』2006年)、「C・ジェフレにおける解釈学的神学と証言」(『日本カトリック神学会誌』2008年)、『キリスト者の証言—人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』(教文館、2017年)他。

いくか、という問いこそ、キリスト者の証言に取り組むことの核心にあります。

社会学と神学の交差する地点にどう立つか

人が何かを語るということへの問いは、社会学で扱われる「ライフヒストリー」(生活史)の研究と深くかかわり合います。ライフストーリーと向き合うには、二つの全く異なる視点があります。ピーター・L・バーガーは『聖なる天蓋—神聖世界の社会学(1967)』の終わりの部分で、社会学と神学との間にある断絶について言及しています。

まず、社会学は人間の経験の枠組みから物事を捉えます。しかも実際の時間の制約の中で経験される、人間の側からの視座を重視します。

ここで、沖縄のキャバ嬢のライフストーリーを紹介しましょう(岸政彦他著『atプラス 28—生活史』太田出版 2016年)。貧しさの中で何とか生きていこうとする、ひとりの女の子の話から、彼女がキャバ嬢にならざるを得ないその生活の周りの事実が語り出されます。彼女にとって、世界は「温かなもの」として捉えられています。ところが、その温かな世界を「冷たい世界」が覆っているのです。メディアで取り上げられるような「大きい歴史」、すなわち日米関係を背後にもつ沖縄の社会、政治、経済の問題という冷たい現実が彼女の温かな世界を覆っているのです。これら二つの世界は統合されることなく、矛盾をはらんでいます。そうした中で生きる彼女の話に表される事実に徹底して向き合っていくこと。それが社会学の立ち位置となります。

それに対して「神学」の立ち位置は、時間の制約の中で経験されることとは対照的に、非経験的で形而上学的あるいは抽象的ともいえる、永遠の相の究極的事柄を扱います。それは三位一体

などの教義であったり、規範的な原則であったりします。これらは、個人が経験することがなくても、形而上学的次元に存在するものとして捉えられます。そして宗教が伝える究極的な事柄は人々の規範秩序を提供し、規範喪失といういわばアノミー状態から人々を守る役割を果たします。

社会学： 経験原則の枠から出された問題
(宗教は人間の投射、人間の歴史
の特殊な下部構造) *時間の相*

↓ ↑
神学： 非経験的・規範的な原則からなる
枠の解答 *永遠の相*
(宗教は人々の規範喪失から守る
宗教が人々の規範秩序となる)

宗教を社会学的に捉えると、それはあくまで「人間による投射」となります。一見相反するこれらの二つは、現実の人間経験を場とすると、双方とも他方を排除することはできません。ライフヒストリーの語りの中では、両者の断絶を越えたところへと向かっていきます。P. バーガーは次のように述べます。

「宗教が人間による投射だと言うからといって、投射された意味が人間から独立したある究極的な地位を持ち得るかも知れぬ可能性をも論理的に締め出すことにならない。……人間が現実^{アノミー}に究極的な意味を投射するのは、その現実がまさしく究極的に意味深いからであり、また彼自身の存在(こうした投射の経験的基盤)がこうした同じ究極的な意味深さを含み込み、目指しているからこそなのである」(『聖なる天蓋』270頁)。

「イエスを知っている」ということ

神学は、20世紀初頭から長い間、哲学、社会学、倫理学などと交差し合って、解体作業がなされています。その中で、注目されるべきことは、カール・バルトによって語りの重要性が主張されたことです。「和解は一つの歴史である。それを知りたい者は歴史のように知らなければならない。それを考察したい者は歴史に対して考察するようにしなければならない」(「和解論」教会教義学)と述べています。また、旧約聖書の神学者フォン・

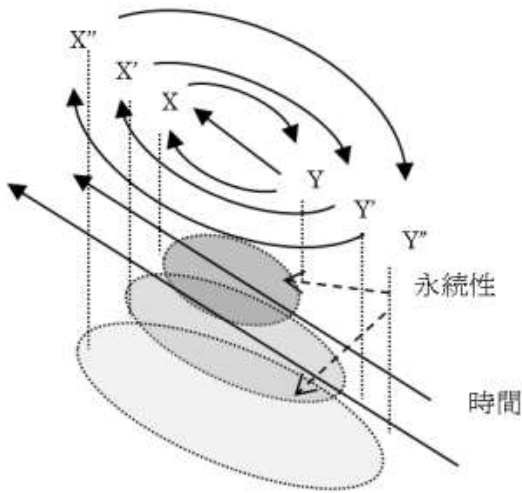
ラートは、「旧約聖書にもっとも相応しい神学的言説は物語のうちに住まっている」と述べています。さらにエルネスト・ケーゼマンは、ケリュグマの実存的解釈を主張したルドルフ・ブルトマンに対して、「大切なのはケリュグマを宣言するだけでなく語ることもある」と述べています。物語神学(la *théologie narrative*)の系譜をたどるなら、彼らは「語りの重要性」を発見した世代となります¹。

■人間は時間軸を生きる存在

今回のフォーラムでは、P. リクール『他者のような自己自身』の視点から、証しをすることの意味を考えてみます。彼によると、アイデンティティとは、自己性と同一性の二つで成立するものです。私である主体がここにある、という「自己性」とは、いわば、「私自身らしさ」とも言えます。それを学生に説明する場合、ある写真を見せます。それは、三百メートルぐらいの山の上で「三千メートルの山頂だ」と言わんばかりに得意になっている私の小さい頃の写真を見せ、「これは私です」と言います。「自己性」の主張となるわけです。

次に同一性を説明する際、別の3つの写真を見せます。幼児の頃の写真、中学生の頃の写真、そして最近の写真。それらすべてを見せて、「これは私であり、同一です」と言います。ここで、同一性を主張できるのはなぜなのでしょう。それは、時間軸の故であり、そこに永遠性があるからです。時間軸は矢印のように進んでいますが、振り返って幼少期の頃も、中学生の頃も、どれも私であると言えるのは、時間軸を越えている永続性の故なのです。10年前の私と、今の私が「同一」であると言えるのは、10年間の時間の根底に、

¹ バルトら語りの重要性を発見した時期を第一世代と位置づけ、続いて、第二世代には、ポスト・ナラティブ時代の危機と対峙した J.B.メッツが取り上げられる。彼の『宗教言語の危機に関して』(1973)が挙げられます。さらに第三世代では、メッツの問題提起をすすめ、神学的根拠に裏付けされた物語神学を展開しました。代表的なものは、聖書釈義におけるナラトロジーを論じたロバート・アルター(R. Alter, 1981)、歴史的(物語的)認識論のセルトー(Michel de Certeau, 1975)、P. リコールの『時間と物語』(P. Ricoeur, 1983)、さらにE. ユングルの『世界の神秘としての神』(E. Jünger, 1983)やPaul Beauchampの『物語、手紙、身体』(1990)などが挙げられる。



永続性があるからです。その永続性の上に、私という「自己」があります。この「自己」が、明日、同じように「自己」であるためには、「私は、明日、……をする、……である」と、あらかじめ言葉で、自分を決めていかねばなりません。このことを「投企」と言います。そして、明日、自分が言葉で決めたとおり実行して、明日への永続性ができていく。「明日私は……をする、……である」と信じることから、自分自身が始まっているのです。これが「自己同一性」です。

■ 想い起こし、語る主体である〈私〉 ＝ 物語的自己同一性

リクールは、「想い起こすことができる私」、「語る主体である私」を踏まえて「物語的自己同一性」を説明します。「言葉」を発するという状況（発話）において、「私が、〇〇について、そうだ（と確信する）」と、誰かの目の前で「言う」ときに、「私」は生まれます。すなわち、嘘と真実の間を揺れ動くような感覚の影響を受けながらも、また、時間の流れの中で、忘却の彼方に記憶が押し流されながらも、「私」が「そうである」と忠実に言える「いま、ここに」こそ、「私」は存在する。そこでの「私」は、他の誰をも代入することはできない「私」として、世界の中心軸となる……ということなのです。

パウロはガラテヤの信徒への手紙1章11-17節で自分の経験を次のように述べています。

きょうだいたち、どうか知っておいてほしい。私が告げ知らせた福音は人によるものではありません。

なぜならこの私は、その福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、実にイエス・キリストの啓示を通して受けたからです。私がかつてユダヤ教徒としてどのように振る舞っていたかは、あなたがたが聞いているとおりです。……しかし、母の胎にいたときから私を選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに、御子を私に示して、異邦人に御子を告げ知らせるようにされたとき、私は、人に相談することはせず、また、私よりも先に使徒となった人たちがいるエルサレムへ上ることもせず、直ちにアラビアに出て行き、そこから再びダマスコに戻ったのです。（聖書協会共同訳）

私の中に超越した永続性なる存在を自分の中心に据えて、そこから生きていくという啓示を受ける経験を語っています。このような中心軸は、言語化をすることが実に難しいものです。ですから、パウロは、「福音」とか「啓示」についての説明はほとんどしていません。しかし、その受けた経験そのものによって突き動かされているのです。それは、「生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を献げられた神の子の真実によるものです」（ガラテヤ 2:20）と言われる経験となっています。これは、キリストに出会う経験、キリストを目撃する経験を越えて、自らの内の存在の永続的な軸に据えられる経験なのです。

証言の形象化：ミメシス・アーチ

最後に、リクールの『時間と物語』にある証言の形象化から考えてまいります。次頁の図にある「ミメシス」は、アリストテレスの用語でミムすなわち「模倣する」という言葉から来ています。このアーチは、物語を人はどのように読解するかを理解を深めます。リクールによると、物語を読むとは、読者が物語を形作る作業に参加することです。曲線があるのは、紆余曲折を通してミメシスⅠからⅢへと進んでいくからです。その根底には時間軸（点線）があります。

アリストテレスによると、物語のひな型は、初めがあり、中があり、終わりがあります。そのひな型

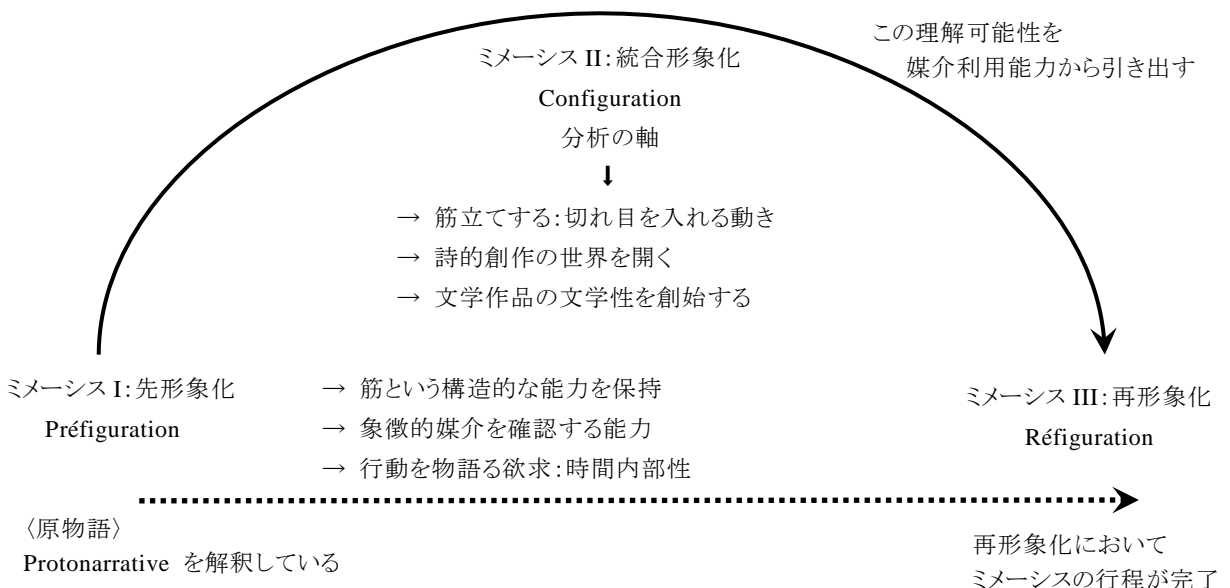
が人間の内に形成されている、トリクールは考えます。このことを順を追って考えていくと、まずミメーシスⅠの先形象化では、人が物語を読むうえで、すでに読んだり聞いたりしてきてその内側に形成された物語を指しています。そして、ミメーシスⅡの統合形象化では、目の前でテキストとして読んでいるときに、先形象化されたもの、すなわち内在化された物語と重ね合わせて読んでいくのです。自分自身も自分の内側にある物語を用いて、新たな物語を創作しているように読んでいくのです。そこに筋立てを見出し、詩的創作の世界を開いていくので、読者は自ら作品を作り上げていくように読むのだとトリクールは述べています。そして最終的に物語が終わるにつれて、「こういう物語だったのだ」として、物語を創造的に読む行程が完了するというのです。

テキストという形態であれば、物語はいったん語り手から離れ固定化されます。しかし、語りやインタビューの中では、その物語が動いています。語る人は聞く人と共に物語を創作していきます。聞く人も、自分の生活史や先行物語を重ね合わせながら、語る人と共に物語を形作っていきます。そして、共に一つの物語を作り上げ共有するところへと進んでいくのです。

パウロが、イエス・キリストの真実を見出だしたというとき、誰かの中に働いているキリストに、自ら介入して、聞いていたこと、見たこと、学んだこと

を重ね合わせながら、自らの内にその方をコンフィギュレート(統合形象化)し、リフィギュレート(再形象化)していったのだといえるのです。だからこそ、他者が必要なのです。相手の中にキリストを見出していくからです。証しし、語る中で、語る者聞く者とが共に内なるキリストと出会っていくのです。

《キリスト者の証言として》という非中立性は《聞き手》と《語り手》の両者に前提的理解をもたらしている。《キリスト者の証言》という非中立性において、聞き手と語り手は、ともに協働し、参与し合いながらテキスト全体を創り上げていくのである。(中略)つまり、《キリスト者の証言として》という非中立性は人の信仰の経験を説明し、解釈するという点で、すでに、啓示の認識論的地平を切り開く契機となる可能性を潜在的に内包している。(中略)《語り手》は自らの信仰の経験の歴史を想起し、《キリスト者の証言》として語る。このプロセスにおいて作用する《説明—解釈》を、先行する《了解》は同伴し、それを包む。《語り手》も《聞き手》もともに、真に聞く人、真の聞き手となるならば、《キリスト者の証言》の中で《救いの了解》に包まれ、それを聞き、それを受け止めることができる。(原敬子『キリスト者の証言』pp.135-138)



TMRIからのお知らせ

◇冬季フォーラムの報告

・ 去る2月25日(月)午後2時半よりお茶の水クリスチャンセンターにて「キリスト者の証言—人の言語化の営みから宣教を考える」と題してフォーラムが開かれました。講師に、原敬子氏(上智大学神学部准教授)をお招きして開催されました。その内容は、レスポンドの西岡TM総主事が今号の所報で紹介しています。

◇2019年夏季学校のお知らせ

・ 来る6月24日(月)～26日(水)には、「文化の神学—神の国の平和をもたらす文化を変革する教会」と題して夏季学校が開催されます。今回は、藤原淳賀氏(青山学院大学 地球社会共生学部教授・宗教主任)を招いております。プロテスタントの代表的な神学者(ニーバー、バルト、ハワーズ、ヨーダー、ティリッヒ)と対話しつつ日本のキリスト教史を概観し、ナショナリズムの高まる現在、神の民がいかに平和を作っていくのかを考察します。ご期待ください。

献金者名

2018. 12. 1～2019. 4. 31 (敬称略)

◇団体: 新井キリスト教会、鹿児島武キリスト教会、川越のぞみ教会、長井教会、O.M.S.、熊本植木キリスト教会、厚木キリスト教会、標茶キリスト教会、東京基督教会、大阪栄光キリスト教会、蒲郡キリスト教会、メノナイ教会連合、丸亀聖書教会、練馬神の教会、保恵キリスト教会、池の上教会グレース会

◇個人: 小林重昭、飯島延浩、飯島庸江、三木勝喜、塩谷惇子、千代崎聖子、横坂節子、岡澄子、萩生田明、小林光生、島田恒、立石充子、児島康夫、西岡義行、金本史子、中川美弥子

* 尊い献金を心から感謝いたします。

(巻頭言つづき) 令和の時代に東京ミッション研究所では、研究員一人ひとりが与えられている課題に真剣に向き合いつつ、ネットワークを活用し情報を共有しつつ、共に問題と向き合うであろう。そのために研究所の使命を再確認し、ネットワークを維持発展させることが大切である。令和の時代に神様が東京ミッション研究所をどのように用いてくださるのか楽しみである。

◇◇◇◇◇◇ 東京ミッション研究所からの書籍案内 ◇◇◇◇◇◇

- 1 『天皇制の検証—日本宣教における不可避な課題』 ロバート・リー編 新教出版社 1700→1400 円
- 2 『これからの日本の宣教—発想の大転換』 TMRI 編 いのちのことば社 2200→1500 円
- 3 『宣教のパラダイム転換上・聖書の時代から宗教改革まで』 D. ボッシュ著 7035→6000 円
- 4 『宣教のパラダイム転換下・啓蒙主義から21世紀に向けて』 D. ボッシュ著 7875→7000 円
TMRI 訳 新教出版社(上下一括割引 14910→12500 円)
- 5 『日本と西洋キリスト教—文明の衝突を超えて』 ロバート・リー著 TMRI 訳 2940→2400 円
- 6 『<聖>をめざす旅』 アラン・クライダー著 棚瀬多喜雄訳 東京ミッション研究所 3150→2500 円
- 7 『社会を動かす礼拝共同体』 J. H. ヨーダー著 矢口以文・矢口洋生・西岡訳 TMRI 2940→2300 円
- 8 『愛する人が襲われたら』 J. H. ヨーダー著 棚瀬多喜雄訳 TMRI 2100→1500 円
- 9 『赦し—新しい人間関係を生み出す』D.アウグスバーガー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 1700 円
- 10 『イエスの平和を生きる—激動の時代に読む山上の説教』 グレン・スタッセン、デービッド・P・ガッシー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 2100→1700 円
- 11 『平和の契約—福音の聖書神学的理解』 ウィラード・スワートリー著 東京ミッション研究所訳 いのちのことば社 特別価格 7140→5000 円 (まとめて買うとさらに割引が可能です。)
- 12 『敵対から共生へ—平和づくりの実践ガイド』ジョン・ポール・レデラック著 水野節子・宮崎誉共訳、解説・片野淳彦、西岡義行 東京ミッション研究所 ヨベル社 1050 円 → 800 円
- 13 『ジョン・H・ヨーダーの神学—平和をつくり出す小羊の戦い』ヨーダー研究会(中島真実、矢口洋生、藤原淳賀、マーク・ネイション)東京ミッション研究所 新教出版社 1950 円→1700 円
- 14 『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』クリストファー・J・H・ライト著 TMRI 訳 いのちのことば社
- 15 『イエスの足跡に従う—アナバプテストの伝統』A.スナイダー著 中川美弥子訳 ↑1～3 巻
矢口以文共訳 東條隆進監修 東京ミッション研究所 2000 円